会員投稿　『Ｔｏｋｙｏ　漫歩』（その１）

ひ　ま　じ　ん

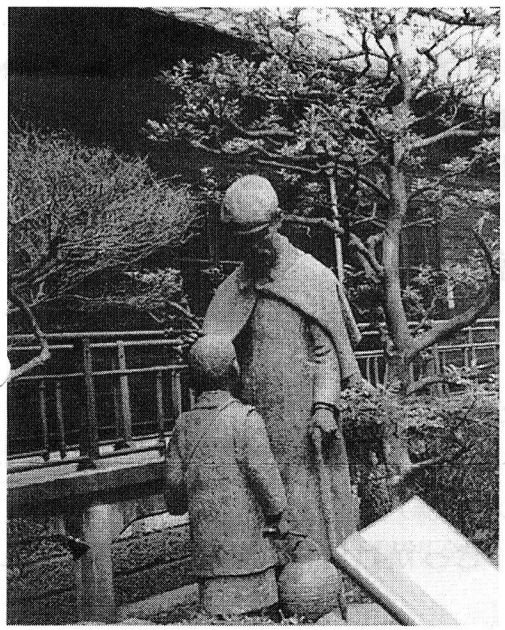
なぜ東京なのか。群馬から近い。かつ、４００年の歴史があり、多くの人々が足跡を残している。そこであまり知られていない東京を散策し、数回にわたりご紹介してみよう。但し、筆者が何分ロートルのため、必然的に古びた事象が多く、訪ねてみたら「ツマラヌ」と感じる方も多いかも知れませんが、物好きな方・ツイデがある方は出掛けてみて下さい。

軍　神　の　社　（やしろ）

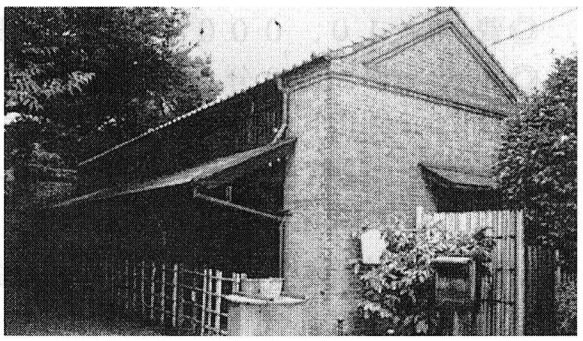
１．乃木神社（港区赤坂　８－１１－２７）

軍人という言葉も死語になったのかな。戦前は「軍人さん」といえば、立派な人の代名詞のようだった。この立派な軍人さんの中でも、神様になった人はあまり多くはあるまい。乃木希典はその代表的な人だろう。日露戦争における旅順要塞攻撃の司令官として従軍し、（この間、子息二人も戦死）戦後は学習院長をつとめたが、明治天皇大葬の日、夫人とともに殉死した。

この劇的な人生・生涯を通じての清冽さ、国に対する忠誠心が当時の人々の心をとらえ、神として夫人ともども、祭られることになったという。ここへ行くのは地下鉄千代田線「乃木坂」が便利。道標に従い徒歩一分で、道の向こうにレンガ造りの建物がみえる。これが乃木邸の一郭、レンガづくりは厩であった。室内へは入れないが周りから中を窺える。明治時代の将軍の生活ぶりを想像してみよう。



乃木邸と銅像



厩

神社は庭先を少し下った所にある。境内は約３千坪、全体に簡素な内に、清潔さがただよう。

宝物殿には遺墨・遺品が展示されていて、乃木さんを偲ぶことができる。乃木坂を下ると、左手にＴＢＳの社屋がかいまみえ、赤坂繁華街もほど近い。

２．東郷神社　（渋谷区神宮前　１－５－３）

乃木さんが陸軍の象徴的存在であったのに対し、東郷（平八郎）元帥は海軍の代表格。日露戦役において、聯合艦隊司令長官として指揮にあたり、ロシアバルチック艦隊を全滅し世界的に名をとどろかせた。「勝利の神様」として祭られている。

ここへは原宿から１０分程度、例の竹下通り隣接していて、様変わりした日本の風俗に元帥も苦笑いしているかも知れない。（つづく）

東郷神社回廊の絵

会員投稿　『Ｔｏｋｙｏ　漫歩』（その２）　　ひ　ま　じ　ん

三　菱　さ　ん

戦前の江戸っ子は「三菱さん」などとはあまり言わなかったらしい。市内周辺に工場もすくなかったし、いわゆる官員さんに近い存在だったのだろう。そこへいくと、長崎・神戸・名古屋周辺での話は羨ましい。一見の飲み屋でも、三菱の何某と名乗れば、ママさんの愛嬌もいいし、ツケもきいたという。近頃ではどうだろうか。

三菱の創始者が岩崎弥太郎であることはご存知の通り。戦前まで「三菱合資会社（持株会社）」の社長は岩崎家が踏襲していた。戦後の財閥解体により、三菱各社が再スタートして60年、岩崎さんも昔ばなしになったが、東京にはかなりの足跡がある。そのいくつかを紹介してみよう。

１．旧岩崎邸庭園（台東区池之端１－３－４５）

ＪＲ御徒町駅より、徒歩約15分。湯島天神の北部にある。明治29年岩崎家本邸として建てられ平成13年一般に開園された。往時は１万５千坪の敷地に、２０棟の建物があったという。現在　敷地は５千坪、洋館・和館の一部・撞球室が残されている。

（　洋　館　）

（　撞　球　室　）

休日には野外コンサート等も開かれ、このとき庭内に憩えば、王侯の気分を味わえることだろう。園外の西側に三菱経済研究所付属「**三菱史料館**」がある。休日は休館で、名前ほどの規模ではないが一応紹介しておこう。

２．静嘉堂文庫（世田谷区岡本２－２３－１）

三菱の足跡のある所では、その他駒込「六義園」・深川「清澄庭園」等があるが有名なので、割愛し、市内奥座敷的な場所にあるここを取り上げよう。

東急新玉川線二子玉川園駅よりバス15分、文庫前下車徒歩3分とかなりややこしい。本文庫は二代目岩崎弥之助・三代目小弥太が収集した和漢の書籍２０万冊と東洋古美術6千点を所蔵し、逐次展示されている。なかでも国宝「耀変天目茶碗」は有名で訪れる人の大半が、これがお目当てとのこと。庭内にはコンドル氏（上記洋館の設計者）が設計した石造塔廟もあり、静謐な雰囲気に浸るのも一興かも知れない。

ご連絡（会社正門における、構内入退場の取扱いについて）

全社的な企業機密管理・セキュリティ強化の観点から、正門における構内入退場の取扱いが変更になりました。来所の際は、正門受付の保安警務員の指示に従って入門されるようお願い致します。

会員投稿　『Ｔｏｋｙｏ　漫歩（その３）』　　ひ　ま　じ　ん

江戸時代の刑場跡

江戸時代の刑場跡など、時代小説を読んで頭のすみにあっても、訪れる人はめったにあるまい。推理作家の宮部みゆき氏がある雑誌に、要領よく案内されていたのを、読んだ記憶があるのだが、散逸してしまった。当時の刑場跡などみて、「どうなるの」と、私の半身はつぶやくのだが、知らない人も多いだろうし、不気味な所への興味も捨てがたい。以下ご紹介してみよう。

１．鈴ヶ森刑場跡（品川区南大井）

京浜急行・立会川駅を出て、東に向かい、旧東海道と第一京浜の合流する地点にある。かつては鬱蒼たる森だったか。旅人は東海道をさかのぼり、いよいよ江戸へ入る時この脇を通過したのだろう。

ここは、後記の小塚原とともに、江戸時代の仕置場であった。当時の刑罰は厳しく１０両以上盗めば死刑であった。獄門（さらし首）・はりつけ・火あぶり等の極刑は、鈴が森と小塚原で執行された。

刑場跡に建つ大経寺には、執行の際の台石が残されている。処刑された罪人には丸橋忠弥・天一坊・八百屋お七・平井権八等の名がある。今でも、このあたりに処刑者の怨念が漂うがごとく。

［ 鈴が森刑場跡 ］

［ 小塚原延命地蔵 ］

２．小塚原刑場跡（荒川区南千住）

日比谷線南千住駅南口を出る。このあたり一帯は江戸時代小塚原仕置場跡である。旧日光・奥州街道の出入り口であった。明治初年刑場廃止までに、約２０万人が処刑されたと言われている。刑死者の菩提を弔うためつくられた延命地蔵（延命寺）と**小塚原回向院**を尋ねてみよう。回向院には安政の大獄で刑死した橋本左内・吉田松陰の顕彰碑や鼠小僧次郎吉等の墓が多数ある。また、観臓記念碑が名高い。これは前野良沢・杉田玄白等による我が国最初の解剖がこの地で行われたことを記念したものである。西洋医学の先駆けという。

３．伝馬町牢屋敷跡（中央区小伝馬町　十思公園内）

刑場跡がいずれも江戸市中のはずれに位置していたが、ここは日本橋に近く、中央にあったといえよう。この牢屋敷は未決囚の収容所で、数十万人の入牢者があったといわれている。牢内の住環境ははなはだ悪く、牢内における陰惨な物語が多く残された。明治８年　市谷刑務所に移され廃止となった。公園には「吉田松陰先生終焉之地碑」がある。

【 会員投稿 】

Tokyo 漫歩（その4）

ひ ま じ ん

文 豪 の 足 跡

ただ前置きなしに文豪と言うと、夏目漱石と森鴎外を指すことが一般であるようだ。
それほど二人の存在は大きく、後代への影響力も甚大であった。両者に共通するのは、幼年期からの非常な秀才振り、新帰朝者（海外留学者）、外国語の権威（漱石・・英語、鴎外・・独逸語）、二束のワラジ（教師と軍人）、弟子・崇拝者の多さ等々。際立つことが多い。
近来の評価は、江戸期独特の古い・いまわしの言葉を、現代にも使える文章語として確立した功績が大きいと言われている。
当時の苦労はよく判らないが、近代作家の先駆者であったのだろう。 二人とも生涯の大半を東京で過ごしたにかかわらず、これらの足跡はあまり残されていない。
戦後没した作家については立派な記念館が作られることが多いのに、戦前のそれは時の社会情勢・経済力の欠しさの反映からか、やや物足りなさを感じる。

1. 漱石公園 （ 新宿区早稲田南町 ）

早稲田大学近辺の喧騒から離れ、早稲田通りを、神楽坂方面に向かう途中にある。

［ 漱石公園 ］

ただ標識も無いし、近くの人も知らないので、尋ねるのも容易ではない。
かって漱石が晩年を過ごした「漱石山房」の跡地であり、ここで亡くなった。
園内には、漱石の胸像と 「猫塚」が建てられているが、邸内の面影はどこにもない。
ここから10分ほどの夏目坂（父がこの一帯の名主で、坂の名前にもこの名がつけられたという）には生誕の地の碑もある。

2. 本郷図書館鴎外記念室 （ 文京区千駄木 ）

鴎外の没後、居宅「観潮楼」は2度の災害により消失したが、記念館はここの跡地に建設された。昭和37年に開館され、鴎外の遺品・原稿・書簡・日記などが展示されている。
場所は地下鉄千代田線千駄木駅より、団子坂をのぼる中腹にある。
かっては、この２階から東京湾がうかがえ、湾に浮かぶ白帆も垣間見え、このことから観潮と名付けられた。
鴎外は60歳で没するまでの、30年間ここに住み、多くの小説・評論を書き、歌会を催した。
歌会には与謝野寛・石川啄木・斉藤茂吉等多彩な文学者が集ったといわれている。
先に記した如く、漱石の記念館はなく、鴎外のそれも図書館の付属のもので、いささか淋しい限りである。

（注）漱石の蔵書・遺品類は弟子の小宮豊隆の関係で東北大学で管理しているとのこと。

［ 鴎外記念館 ］

【 会員投稿 】 Ｔｏｋｙｏ　漫歩　（ その５ ）

ひ　ま　じ　ん

芭　蕉　さ　ん

日本の歴史上の人物で「‥‥さん」と呼ばれる人を、思い出してみると。 弘法さん・良寛さん・一休さん・西郷さん・東郷さん等々を想い浮かべるが意外に少ないようだ。普通名詞的な「さん」という敬称には、尊敬プラス親しみが必要なのであろう。芭蕉にはオカシ味がやや少なく、さんを付けるのに若干抵抗があるが、まあいいか。 芭蕉さんはもともと伊賀の人、関西方面で頭角を現し、江戸に来た頃には俳諧の世界では、そこそこ知られた存在であったらしい。やがて、深川に草庵を築き、その庭に芭蕉の株を贈られてから、庵の名も「芭蕉庵」、号も桃清から芭蕉に改めた。それまでの、やや華やかな宗匠の生活から、俳句一筋の境地への変化の表われだったかもしれない。この庵も人に譲ったり、火事にあったりと、当然の変遷があるが、深川の大川端にその痕跡を残した。

芭蕉記念館 （ 江東区常盤 １－６－３ ）

ここへは地下鉄大江戸線森下町が便利、徒歩10分位である。この記念館は昭和 56 年に開館されたというから比較的新しい。芭蕉及び俳諧関係の資料が多数展示されている。周辺には芭蕉稲荷・展望庭園等ゆかりの事跡もある。隅田川の東側からみる都心部の高層ビルの風景もまた一興。

（芭蕉記念館）

（史跡庭園）

ここからは「清澄庭園」も近く、「深川江戸資料館」もあって、古い深川を探るのに好適な場所だといえよう。

芭蕉の句

特に詳しいわけではないが、記念館を見たつもりで、若干のご紹介をしましょう。

「行春や　鳥啼き　魚の目は泪」 ･･･奥の細道　旅立ちの折
「夏草や　兵どもが　夢の跡」 ････平泉　衣川を望み
「旅に病んで　夢は枯野を　かけ廻る」 ･･･　辞世のうた

ナナカミ（類）

あ	く	■	か	き	つ	は	た
う	■	な	り	■	し	ほ	ら
ん	■	で	ん	あ	つ	■	ち
■	さ	し	■	ま	り	わ	り
あ	い	こ	と	ほ	■	こ	■
し	■	お	れ	い	あ	う	と
も	う	で	ん	■	お	ど	り
と	■	ま	ど	ん	な	■	お

この「会員投稿」のコーナーへの投稿を募集しています。「つれずれのまま」「旅行記」「写真集」「思い出話」「趣味悠々」「シニアライフ」「提言」･･･などなんでも結構です。電子データやワープロ等でお気軽に投稿下さい。事務局あて又はメール（hishinomigunma@air.ocn.ne.jp）でお願いいたします。

【 会員投稿 】

Tokyo 漫歩（その 6）

ひ ま じ ん

新 撰 組

江戸の人々にとっては新撰組はあまりなじみの無い存在であった。名も無い剣道場にたむろしていた武士とも農民ともつかない浪人達が、京で名を上げてもピンとこなかったに違いない。
ただし、徳川家の味方であり、「尊王攘夷派」の跳ね返り連中を粛清しているぐらいの情報はあったかも知れない。

その後、鳥羽伏見の戦いに敗れて以降、新撰組のほとんどの人達は、討死し又は捕えられ処刑された。かれらの活躍した時期はわずかに五・六年の間であった。 時はうつり、明治時代の政府高官になった「薩長土肥」の人々にとっては、新撰組は憎むべき殺戮集団であり、歴史的にも抹消すべき存在であったのだろう、しだいに忘れ去られていたと思われる。。

この忘れられた集団を、再び世間に知らしめたのは、明治になってから60年もたった昭和3年に「新撰組始末記」を出した子母沢寛であり、さらに約30年後に司馬遼太郎が新撰組に関する諸作品集を刊行することによって、その活躍が知られ一躍、かれらは寵児になった。以後映画に舞台に、そして、NHK の大河ドラマにも取り上げられることになる。

（近藤勇→香取信吾・土方歳三→山本耕史・沖田総司→藤原竜也等が有名）

人気の源は隊員それぞれの強烈な個性と武士らしく生きるという信念が清冽に感じられることからだろう。この新撰組の痕跡は都心には少なく、多摩の里まで出掛けなければならない。

新撰組のふるさと （ 日野市、中央線日野駅下車）

現在の日野は東京西郊のベッドタウンとして発展しているが、かつては甲州街道の宿場として、知られていたものの、周辺は草深い田舎であった。ここに幕末の名主屋敷の姿を残す佐藤邸がある。

佐 藤 邸

当時の当主佐藤彦五郎は近藤勇と同門であり、歳三の義兄にあたる。
物心両面からの新撰組の支援者であった。

近くに井上源三郎の記念館がある。
井上は派手な活躍はないが長老として貴重な存在であった。

土方 歳三像

又 土方歳三の資料館（生家跡）があるが、後継者の方が住まわれていて、月二回日曜日に開館するのみで、筆者も見ることが出来なかった。

右の写真は同じ日野市の**高輪不動尊**の境内にあるものである。
新撰組が不遇の時も地元では支援者が多かった証左かもしれない。
多摩丘陵の新撰組はいつまでも語り継がれていくことだろう。

＜ おことわり ＞

会員投稿有難うございます。限られた誌面と 構成、タイミングの関係で、現在会員投稿の掲載がずれこんでおります。誠に申し訳ありませんが、順次掲載して参りますので、あしからずご了承下さい。

訃報

首藤 敬一 さん（太田市備前島町 享年79歳）は、 4月27日ご逝去されました。
ご冥福をお祈りすると共に、お知らせします。